

一般の部 最優秀賞

小泉八雲と焼津をめぐる私的な随想

神奈川県横浜市 近藤昌平

教念寺への墓参。それが子供のころの夏休みの恒例行事だった。父方の祖母の古びた墓。彫られた文字のどこかに、よく雨蛙がいた。ときにはそれが蛙でなく、蝶や蜻蛉のこともあつて、父母はいつも「祖母が喜んで出てきた」などと言つた。大きな黒揚羽が我々の周りを飛んでなかなか離れなかつたときなど、その言葉を信じないまでも、少し不思議な気分になつたことをよく憶えている。私が中学に上がるとこの墓参は止んで、以来四十年近くが過ぎた。

偶然、私は焼津出身の妻と結婚し、十数年前から再び焼津を訪れるようになった。妻の実家は清見田公園の近くにあり、ある日、公園の帰りに子供たちと小泉八雲記念館に立ち寄つた。小泉八雲の名で、私はすぐいくつかのことを思い出した。

幼い頃にテレビ映画で見た「耳なし芳一」。全身に経文を書かれた芳一を亡者が探す場面が不気味で直視できなかつた。学生時代に訪ねた松江の八雲旧居。そこで読んで感銘を受けた「神々の国の首都」などである。しかし、展示の中にある教念寺の名は、俄かに私に墓参のことを思い出させた。確かに当時も寺の門前に小泉八雲の名が記されていた。八雲と焼津の関わりを、そのとき私は再発見した。

展示の中で私が特に好きになったのは、八雲が来焼中に夫人に送った手紙だ。私にも妻子があり、夫・父親としてのあり方について考えさせられるからだ。手紙には夫人と家族への切ないばかりの思いが認められ、八雲独自の日本語がカタコトで朴訥なだけに、愛情の強さを表している。私は家庭人

としての八雲の姿について興味を持つようになった。

萩原朔太郎の「小泉八雲の家庭生活」は、多くのエピソードに加えて八雲の手紙にも触れている。「すべて貧困の家に育ち、肉親の愛にめぐまれずして家庭的、環境的の不遇に成長した人々は、そのかつて充たされなかつた心の飢餓を、他の何物にも増して熱情するため、後に彼が一家の主人となつた場合、その妻子の忠実な保護者となり、家庭を樂園化することに熱心である」として、八雲もそのひとりだと評した。記念館の展示にも示されている八雲の生い立ちと漂泊、そしてこの手紙に鑑みれば、この指摘には説得力がある。

私はこの一文を読んで、冒頭の墓参と随分前に亡くなった父について再び思いをめぐらせた。

父は昭和の初め、焼津の小さな商店の、男ばかり四人兄弟の二男として生まれた。今となつては経緯を知る由もないが、祖父母夫婦は折り合いが良くなかつたらしい。父が物心ついたところに離婚、祖母はまもなく亡くなり、祖父は再婚した。この祖父にはあまりかわいがられなかつた、とは父本人から聞かされたことだ。父は若くして祖母の弟である叔父を頼つて上京した。

祖母の墓名が我が家の姓と違うこと、墓参後の父の実家への立ち寄りがぎこちなかつたことを改めて認識したのは、私が大人になつて、これらのことを知つてからのことだ。

子供の私からみても、父は人嫌いで気難しく、どこか充たされなさを抱いていたようだったが、家族をなにより大切に

する「忠実な保護者」のひとりだった。父の生い立ちが父の家庭への思いを強くさせた、と母は信じている。父の今わの際、意識のない父に母は、長い間家族に尽くしてくれてありがとう、と語りかけた。父はこの言葉に満足であったろう。また、そうあって欲しかった。

そして私は、家庭人・八雲が、どのような思いで亡くなっていたのだろうか、と考えずにはいられない。

八雲は強い成功への欲求を持ち、その実現のために人並ならぬ努力をした。生来の性分でもあったが、成功への手段として漂泊し、奇異なものに執着した。その格好のテーマとして東洋の国・日本を発見したが、その西洋化に次第に幻滅していく。萩原は「家庭生活」の末尾でいくつかのエピソード

を挙げ、「世界の国々を漂泊して、ついに心の郷愁を慰められなかった旅人ヘルンは、最後にまたその夢の中で漂泊しながら、見知らぬ遠い国々を旅し歩いた」と記し、八雲を「悲しい詩人」と評した。

しかし、挙げられたエピソードは、死期を知った悲しい詩人の言行とも取れるが、家族への深い愛情からくる温かい家庭人としての心の表れでもあるように思う。埋められなかった「心の郷愁」を補って余りあるほどの家庭人としての充足が、家族を愛し、第二の故郷・焼津に出会った八雲には満ちていたはずだ、と願わずにはいられない。